

■2013年1月5日（土）新年・初土曜日トークイベントを開催しました！

※トーク：映画に登場する 木下愛さんと母・洋子さん×三浦淳子監督

2013年・初土曜日の劇場上映。本日も、たくさんの方にご来場いただきました！
上映後の劇場トークは、映画に登場する 木下愛さんと母・洋子さん×三浦淳子監督！



お母さんの洋子さんは、「さなぎ」撮影以前、愛ちゃんが不登校になった当時からの大変だった時期や、自分自身の気持ちの整理がつくまでの道のりを思い起こしながら語っていただきました！まだ自分の気持ちを言葉で伝えられなかった当時の愛ちゃんがしていた抵抗方法など、「覚えてる？」と本人に問いかけながら語っていただきました！それらの間に断片的な思い出を語ってくれた愛ちゃん。ちなみにほとんど「覚えていない」と、会場は微笑ましい親子トークにたびたび笑いに包まれました。そして傍らには、一緒に当時を思い起こす三浦淳子監督。

■木下洋子さん（愛ちゃんのお母さん）



映画化には当然、複雑な思いがありながらも覚悟はできていたつもりだったが、今日、また脂汗が出てきた。映画のなかでは元気に遊んでいる愛ちゃんだが、どう扱ったらよいか、というくらい荒れた時期があった。暴れるというか、泣くというか、、言葉に出来ない部分を暴れることで伝えようとしていた。取材の入る前、愛が不登校になったばかりの頃、当時は本当にどうしたらよいかわからない状態で、みんな暗くて、家にいるのが辛くて…自分自身が息をつきたくて、山の上のような空の見える高いところに行こうと愛を車に乗せて行こうとすると、後部座席で暴れる。窓から靴を投げ棄てたりして…。

愛の不登校以前は教育ママで、上の二人にはガミガミ母だった。子どもを「ちゃんと育てる」ということにもものすごく一生懸命になっていた。愛が不登校になったとき、傲慢な母の、傲慢な価値観がガラガラと崩れて…本を読んだり、不登校の親の会に参加したり…そうやって自分の中で取捨選択をしていくうちに、「じゃあ、勉強はいらぬ、何はいらぬ…」と一つひとつおろしていくうちに最後に残ったものは【元気であってくれればいい】それが一番大事なことだったんだ、と。青白い、怖い顔をして、子どもの顔ではなかった、この子の笑顔を、なんとか取り戻したいと思ったら、やはり好きなことを探すことになる。「クラスに戻れた」とか「中学で児童会長した」とかは解決ではない。不登校はその子の性質やら資質とか、いろいろあって「ここで良い」とは全然思えない。（…いまだにそうだが）こういう子だから、一生つきあっていくんだろうな、この性質と、と思う。

勉強はしなくても後でついてくると思ったが、同世代と小突いたり小突かれたり、笑ったり泣いたり…みたいなことは、あの田舎社会のなかにおいては学校に行くしか得られないと思った。現在学校図書館で働いているが第二の保健室のようになっている。その子の24時間を学校の先生はみることができない。

今の子どもたちが24時間をどう過ごしているかを考えると、映画のなかの生活のように、遊びまわるので良かったんだな、と思う。今は田舎でさえも家にこもってゲームをしたり、社会教育の分野でも外で遊ばせようとしているんだけど、それが追いつかない。愛の世代もすでにそうだった。今、現場で、学校と闘ったり、悩んだりしているお父さんやお母さんを「かつての私の姿」と思いながらみている。ガミガミ母時代があったから余計…「せっかく生まれてきたんだし、生んだんだから、楽しく生きなきゃね」と。





■木下愛さん

学校…教室のなかで黙々と勉強している、その空気が好きじゃなかった。外で遊んだり、ミニチュアの家具とか、料理とかつくるのが好きだった。ガミガミ母は知らなかった。物心ついたときから洋子さんには「宿題やれ」はもとより<テストの点>も聞かれなかった…むしろ中学くらいになったとき、（ちょっとは気にしてくれたらいいのに！）と思ったほどだった。辛かった時のことを忘れていくくらい、不登校になっても疑問とか対立とかそういうものがなく、スムーズにいった気がしていて、学校に戻るにしても、特に決定的な何かがあったのではなく、自然な流れでいった。

それは「自然」と思っていたけど、実は母や学校の先生、回りの人たちが自分を観察して、自分にあうベースをひいてくれたから疑問を持たずにそれにのって歩いていけるようになっていたんだな、と二十歳過ぎてやっとわかるようになった。



■三浦淳子監督

撮影を通して出会い、長年つきあっていくなかで、母娘の絆を感じた。私自身は夫も子もないので、こんなに子どもを思うということが、羨ましい。HAPPYな状態はそれはそれで素晴らしいが、ここまで心を砕いているその関係が本当に素晴らしいと思う。

また、この母娘の後ろで、言葉を多く発することのない、お父さんはじめ、家族、友だち、それらを包む空間の存在の大切さを感じ、撮影も編集もありのままを大事にした。例えば、お爺ちゃんが卒業式前日に、「愛ちゃん良かったね～」と言う後ろのTVでは、深刻なTVドラマが流れていたり、、そんな乱雑さが日常であり、日常のなかで小さな発見があると嬉しい。



劇場トーク後には、監督とゲストがロビーでサイン会。

学校の現役教師が洋子さんに質問したり、愛ちゃんには不登校の子を持つ親御さんがお礼を言ったり、、その後1Fのカフェ THEOにてお客さまと交流会。新春を祝い、コーヒーとサンドイッチで乾杯しました！

本日はお話の尽きない人々とともに、カフェトーク二次会も開催しました！

～ご来場いただいたみなさま、ありがとうございました～